研 究 者：大田　千央（所属：昭和大学歯学部　小児成育歯科学講座）

研究題目：口腔機能発達不全症の診断と治療法の確立

目　的：

近年日本では「口腔機能発達不全症」が定義され、健常児の口腔機能発達に関する注目度や関心が高まっている。しかしながら、「口腔機能発達不全症」の実態に関しての研究はまだあまり行われていない。そこで本研究は、口腔機能を評価するための医療機器を使用して、様々な検査を行うことで「口腔機能発達不全症」の病態が持つ性質を明らかにし、加えて「口腔機能発達不全症」の現状を把握することで、今後の診断と治療に役立てることを目的とした。

対象および方法：

調査の対象児は３歳から６歳までとし、都内の保育園にて口腔内診察、下腿周囲長、握力、舌圧、口唇閉鎖力、咬合力、うがい評価、構音検査を実施し、日本歯科医学会が提示している「口腔機能発達不全症チェックリスト（離乳完了後）」を使用し、その基準に従って診断した。加えて、対象児の保護者と担当保育士に対してアンケート調査を行った。アンケートの項目として、対象児の年齢、性別、成長履歴、家庭環境、生活習慣、口腔習癖、発音、運動習慣、鼻疾患及び食行動に関する内容について質問を行った。また、担当保育士に対しては、食行動、口腔習癖、発音に関してアンケートを実施した。

上記調査内容とアンケート調査の結果を集計し、分析を行った。すべての統計解析にはWindows 用の SPSS®バージョン 30.0 ソフトウェア（IBM Japan Inc、東京、日本）を用い、統計学的有意水準を５％に設定した。

結果および考察：

【調査結果】

口腔機能発達不全症あり群における舌圧の中央値と範囲は 17.6（8.0-23.2）kPa、口腔機能発達不全症なし群における舌圧の中央値と範囲は 22.0（16.3-28.1）kPa であった。また、口腔機能発達不全症あり群の方がなし群と比較して舌圧の値が有意に低いことが分かった。その他の調査項目に関しては、口腔機能発達不全症あり群となし群で有意な差は認められなかった。

【保護者へのアンケート結果】

アンケートと調査結果から、口腔機能発達不全症のあり群はなし群と比較して「食事に関して不安や困りごとがある」、「噛む時間が長い」、「噛まずに飲み込む」、「鼻の病気がある」という質問に「はい」と回答をした者の割合が有意に高かったことが示された。このことから、口腔機能発達不全症と診断された者は、食行動に何らかの問題があると保護者が認識している可能性が高く、また鼻の疾患にも関係していると推測される。

【保育士へのアンケート結果】

保育士へのアンケートと調査結果から、口腔機能発達不全症のあり群はなし群と比較して「いつも口で呼吸をしていますか？」という質問に「はい」と回答した者の割合が有意に高かったことが示された。このことから、口腔機能発達不全症と診断された者は、口呼吸があると子どもを日中保育している者が認識している可能性が高いと推察される。

アンケート項目	発達不全症あり（N=36）	発達不全症なし（N=49）	p 値
噛まずに飲み込むことが気になることはありますか？（口に入れてから飲み込むまでの時間が５秒未満か５回未満で飲み込んでいる）	19%	25%	.581
指しゃぶりや爪噛みなどの癖がありますか	19%	16%	.709
片側だけで噛んでいることが多いですか	８％	２％	.307
食欲にムラはありますか？	44%	25%	.053
言葉が聞き取りにくいことはありますか？	19%	10%	.227
いつも口で呼吸していますか？	33%	10%	.008**
寝ているときにいびきをしますか	６％	４％	1.00

％は「はい」と解答した者の割合　　$\chi 2$ 検定　　**p<0.01　　N=85

保育園での調査においては、口腔機能発達不全症の有無において、舌圧と食行動の問題、また鼻疾患や口呼吸が関連していることが示唆されたが、外来診療においての現状に関しては報告が少ないことから、今後は外来診療に口腔機能発達不全症の現状把握を目的とした調査を実施し、データベース化できるように、現在調査を実施中である。

成果発表：（予定を含めて口頭発表、学術雑誌など）

今後日本小児歯科学会にてポスター発表予定